
アップルティー

本。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アップルティー

【Zコード】

N6824M

【作者名】

本。

【あらすじ】

『全てが生きている世界』の、ある女の子と、あるコンゴと、ある角砂糖のお話。

(前書き)

微笑んだ物語程、悲しみえをはらんでいる。いつもしゃつた作家さんがあります。そんなお話を田指しました。行方不明だったファイルから発掘第一弾です。

甘いリンゴに甘い砂糖。それって、最強のコンビだと思いません？

何処かにある海の近くに、小ぢんまりした可愛らしい家がありました。

そこには、1人の少女が住んでいました。

「さあ、今日も張り切って過ごしましょう！」

これは、全てが生きている世界の、小さくて大きな物語。

少女の名前はミア。この《全てが生きている世界》の、人間の女の子の住人です。

ミアと一緒に住んでいるのは、リンゴのレンと、角砂糖のマト。レンは女の子で、マトは男の子です。

レンもマトも非常に優れた種族だったので、話すことはもちろん、歩くことも、物を持つことも、食事をすることも出来ました。もちろん、ミアが住んでいる家も、家にいる家具なども、皆生きてはいるのですが、話せる程の知能を持つているのは、ミアとレンとマトを除くと、家であるルアだけでした。

「見て、レン。今日はとっても良い天気よ」

「ええ、そうね、ミア。今日はとても良いピクニック日和だわ」

「それを言つるのは今日で35回目だよ。春になつてからずつと言つてるじゃないか。今日、ピクニックに行つたら、当分の間は騒がない約束だからね。覚えてる？」

人間の女の子、ニアと、リン「」のレンと、角砂糖のマトは、とっても仲良しです。どうやら今日は嘘でピクニックに行くようです。「ええ、ええ、覚えているわ。だから言つたんじゃない。ねえ、ニア

ア

「ええ、そうね。レン」

「全く…。じゃあ、そろそろ行くよ！ルア、行つてくる」マトがこの家であるルアに声をかけました。

「はーい。羨ましいわ、ピクニックなんて。楽しんで来てね！」

「ええ、ありがとう、ルア」

「綺麗な貝殻、拾つてくるわね」

ニアとレンがルアにそう返します。

「行つて来ます」

ニアとレンとマトの声とが重なります。

「行つてらっしゃい

ルアが応えました。

ニアとレンとマトが暮らしている、ルアから、大分離れた場所。そこにもまた、海が広がっていました。ただ、ルアの近くにある海より、美しい色をしていました。

どこまでも伸びる透明な美しい青に、ほんの少しのきらめく緑。それはまるで幻想の様で、そしてまだどこまでも現実感のある色でした。

「今日もまたこの海は美しいのね」

ニアが呟きました。ため息を零す様に、自然に。そうすることがまるで、当然のことの様に。

「ええ、本当に。いつ來ても、この海は美しくあるわレンがそれに応えます。

「まあ、別に…まあまあかな

「安らかな顔をして、マトが言いました。

「またまた。マトは本当に素直じゃ無いわね」

レンがマトをからかう様に言いました。

「なつ…別に、そんなこと、無い」

「マトは、自分が思つてゐるのと反対のこと言つた時、いつも口事が上するから直ぐに分かるのよ」

ミアが、口元に手を当ててくすぐると笑いました。

これには流石のマトも何も言えません。真っ赤になつて口をつべみました。

「ああ、お皿にしましちゃう」

ミアが優しく綺麗に微笑みました。

ミアヒマトヒレンは、自分達が敷いた真っ白いシートの上に座り、お弁当を広げていました。

桃色の可愛らじいお弁当箱と、薄紫色のプラスチック製のお皿が、白と青と緑だけのその場所から少し浮いていました。

「いただきます」

ミアが嬉しそうに言います。

「いただきまーす」

レンとマトも、少しだけ悲しそうな顔をして言いました。

お弁当の中身は、アップルパイやリンゴのタルト、水筒の中身はアップルティーです。とにかく『リンゴ』と『砂糖』をたっぷり使った食べ物ばかりなのです。

お弁当を作ったのはミアでした。これだけ見れば、ミアがレンやマトに意地悪をしている様に見えますが、そうではないのです。

レンはリンゴで、マトは角砂糖です。ですから、何であつても食べられることは食べられるのですが、一番栄養をとれるのは、自分と同じ種類のものを食べることなのです。なので、ミアは自分が食

事当番の時は、なるべくリンゴと砂糖をたくさん使った料理を作っているのです。それがミアの優しさでありました。

「甘くて、美味しいわ。私、アップルパイ大好きなの。ごめんなさい、もう飽きました？」

ミアが言いました。何気ない様で、残酷な様で、何処までも優しい言葉でした。

「いいえ、大丈夫よ、ミア」

「ああ、ミアは料理が上手いからね」

レンとマトが言いました。静かだけれど、愛おしそうな声でした。

「そう、良かったわ…。でも私、アップルティーが一番好きなの。甘くて、酸っぱくて…大好き」

ミアがカップを手に、胸をきゅっと掘まれるような、甘い声で言いました。

「ええ、私もアップルティーは好きよ。何だか、ほつとするの」

レンが言いました。

「僕も、アップルティーは好きだよ。何だか、甘さが、砂糖だけじゃなくて、リンゴだけじゃなくて、…何とも言えない、アップルティーの甘さなんだ」

マトが呟く様に言いました。

「ふふふ」

ミアが笑いながら、アップルティーの入ったカップを手に、海の方へと歩いて行きます。いつの間にか裸足になっていました。

「レン、マト、大好きよ。ずっと私と一緒にいてね」

レンとマトの方を真つ直ぐに見ながら、ミアが言いました。そのまま後ろへと、ぽちや、ぽちやと音を立てて一步一歩下がつて行きます。

「ミア、前を見ないと

危ないよ」とマトが続けようとした時、

「きやあっ」

ミアが小さく悲鳴を上げて、後ろの方へすつてんころりんと転び

ました。

「「ミアッ」」

レンとマトの声が重なり、ミアの元へと駆け出します。

「ミア、大丈夫？」

レンがミアの隣まで泳いで来ると、尋ねました。

「だつ 大丈夫…」

「全く、心配かけないでよね」

マトが呆れた様に言いました。

「じめんなさい…でも、ほらー見て、空」

レンとマトが空を振り仰ぎます。

風が、せりせり。雲が、ふわふわ。

「気持ち良いね」

ミアとレンとマトは、海にぶかぶかと浮き沈みしながら、空を見て、瞳を閉じました。

「あつ」

ミアのカップは何処かに無くなつて、代わりに海全体がアップルティーになつていきました。

甘い甘い、アップルティー！」。

「嬉しいね、レン」

「ええ、それに、美味しいわ」

ここは《全てが生きている世界》ですから、もちろん海も生きていて、それでミアとレンとマトは、いつもこの海のことを美しいと言つていましたので、海は常々お礼をしたいと思つていました。

「ありがとう、海さん」

ミアがお礼を言つと、ほんの少しアップルティーの海が桃色になりました。

「ねえ、何だか幸せね」

「ええ」

「ああ」

「ふかふか、ふかふか。女の子と、リンゴと、角砂糖が、アップル

ティーの海で浮き沈みしていました。空を見ながら、実際に幸せそう
な顔をして。

甘いコンゴに、甘い砂糖。それって、最強のコンビだと
と思いません?

ねえ、だから アップルティーって、
凄いよね?

(後書き)

マトは溶けません。優れた角砂糖なので。
2年ほど前に授業中、リンゴ、海、砂糖の三題で書いたお話。色々
酷いですが、まあ、見逃して頂けるとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6824m/>

アップルティー

2011年3月11日22時40分発行